日本マス・コミュニケーション学会・2014年度秋季研究発表会・研究発表論文
日時：2014年11月8日／会場：東洋大学白山校舎

明治百年祭（1968年）と「京都」イメージの確立
Meiji Centennial (1968) and The Establishment of Kyoto Image

トパチョール・ハサン
TOPACOGLU Hasan

京都大学大学院　メディア文化論研究室（博士1回生）

要旨･･･1968年10月23日に明治元年（1868）から一世紀がたったことを記念して「明治百年祭」イベントが行われた。これは戦後日本の一大メディア・イベントとして佐藤栄作内閣によって東京を中心に日本全国で開催された。佐藤栄作内閣は「明治百年祭」イベントを通して日本の過去百年の歴史を国民に肯定的に見せようとしたが、それに対して、歴史学者、教育者などが「明治百年祭は歴史をゆがめる」ものだと判断し、大きな反対運動を引き起こした。地域によってイベントが持つ意味には相違点があるが、本研究では地域研究として京都のそれを分析した。中でも最も意味のあるものとして明治百年祭に合わせて製作された映画『祇園祭』に着目し、京都における「明治百年祭」イベントの意味とそれが「京都」イメージに与えた影響を明らかにした。最後に、「明治百年祭」イベント研究の重要性を将来の「トルコ共和国百年祭」（2023年）イベントとの関連で説明した。
キーワード　明治百年祭、反対運動、「京都」イメージ、トルコ共和国百年祭

１．はじめに

戦後日本の歴史的イベントを検討してみると、1968 年の「明治百年祭」は「東京オリンピック」、「日本万国博覧会」と並んで重要な行事だったと思われる。1964 年に行われた東京オリンピックは、日本の戦後復興の象徴としての意味があり、大きな歴史的転換点であった。東京オリンピックにおいて、日本は世界各国に先進国として認められ、世界大戦敗北の心理的挫折から自信を回復した。1970 年に「人類の進歩と調和」をテーマに掲げた日本万国博覧会、いわゆる大阪万博という舞台では、日本が近代化の最先端にいること、また平和な国として繁栄を遂げていることを、日本国民は自己認識した。こうしたイベントの結果、それまで海外ではほとんど知られていなかった現代日本の文化も紹介されるようになった。

戦後日本の国家イベントに関する先行研究として、吉見俊哉『万博幻想』（2005）や古川隆久『皇紀・万博・オリンピック：皇室ブランドと経済発展』(1998)などがある。日本人研究者だけでなく、外国人研究者のものとして、Carl A. Posey『The XVIII Olympiad: Tokyo 1964, Grenoble 1968 (Olympic Century)』(1966)、Ralph Gray『Japan - Old and New / Osaka Expo / Space Preview / Rose Aphids / Fra Mauro / Slime Molds / Pikes Peak』(1970)がある。しかし、このような東京オリンピックや日本万国博覧会の研究蓄積に比べると、明治百年祭に関する研究は圧倒的に少ない。小野俊太郎『明治百年ーもうひとつの 1968』(2012)が唯一のものである。ただ、これは「明治百年祭」イベントが行われた 1968 年に、日本でその他どのようなイベントが行われ、どのような事件が発生し、どのような社会変化が現れたかに着目することが多く、「明治百年祭」イベント自体を詳細に分析するものではない。また、「明治百年祭」に対する政府のねらいやジャーナリズムの反応に関する分析、ましてや、各地において行われた「明治百年祭」イベントの内容の差異についての説明がほとんどない。本研究の主なる課題は 2 つあり、1 つ目は、東京を中心に政府によって行われた「明治百年祭」イベントの内容とそれに対する反応について説明する。さらに、京都で行われたイベントが政府の狙いといかに異なっていたことを明らかにすることである。2 つ目は、京都の「京都府開庁百年祭」イベントの中で、日本人の祇園祭と「京都」イメージに最も影響を与えたもの、映画『祇園祭』について分析し、その効果を分析することである。

２．　「明治百年祭」イベント

●　準備会議とそれにおける歴史学者とメディアの反応

佐藤栄作内閣は1966年3月25日、二年後に開催する「明治百年記念事業」計画を閣議決定した 。また、閣議了解の線に沿い、

明治百年記念行事を全国民的規模において実施するよう記念式典実施の時期その他の記念行事の内容や実施方法等に関し各界の意見を聞くため、1966年4月15日にも準備会議が行われた。本会議では、閣議決定により、同日をもって、国務大臣等国の機関から20名、各界団体代表者から25名、学識経験者として42名、計87名の委員が委嘱された 。本会議をもって、イベントの目的、庶務、主宰者なども決定された 。「明治百年祭」の基本理念「『明治百年祭』をどのように祝うか」に関して、1966年11月2日に行われた第三回会議において次の五点が決定された 。

① 第一点目は、明治改元以降百年の日本の歴史の位置づけについて示している。明治以降百年が「世界史にも類例を見ぬ飛躍と高揚の時代」であったと評価している。「日本はこのあいだに封建制度から脱却し、全国民は驚くべき勇気と精力をかたむけ、近代国家建設という目標に向かってまい進したのだ。」

② 二点目として、近代化の歩みを評価しつつ「この百年間」は、「世界を鼓舞した壮挙もあれば、顧みてただすべきのこともないとは言えなかった」時代であるとしている。しかし、「大戦禍」にもかかわらず日本は「世界の奇跡と驚嘆されるまでに急速に復興し繁栄」したという。

③ 三点目として、日本の現状についての認識が述べられている。それは、明治以降の「欧米に追いつき、追い抜く」という近代化の歩みも「ある程度までは達成され」、いまや、「発展途上にある隣邦友邦諸国から指導と援助を求められる立場にもなっている」という判断である。

④ 四点目では、このような内外の諸情勢と日本の国際的地位の変化に対応する「次の日本の担い手である若い世代」への期待が述べられている。

⑤ 五点目として、「過去の事績を顧みるにとどまらず、その遺産である経験と教訓を現代に生かし、国際的視野のもとに新世紀への歩みを正しくかつ確固としたもの」とするため明治百年を記念し祝うのだと、明治百年祭開催の目的を説明している。

政府の以上の意図に対して、日本史研究会は「『明治百年祭』に対する日本史研究会の態度」（1968）で「明治百年祭」イベントに関して次のような声明を出している。「われわれは、日本国民の一員として、また、とりわけ歴史学の研究、教育、普及にたずさわるものとして、この政府の主唱する記念行事に賛意を表することはできない。なぜなら、この企画は、記念すべき対象を意識的にすりかえており、そして、その取り替えられた対象を国民に祝わせようとする企画者たちの意図に、極めて危険なものがあると判断されるからです」 と批判している。また各新聞においても反応が見られ、政府の意図に賛成している新聞もあれば、反対派の新聞も確認できる。あるいは、同じ新聞でも賛成・反対両方の立場から書かれた記事が見られる場合もある。しかし、イベントが正式に開始されると共にその反応がはっきりしてくる。

● 「明治百年祭記念式典」とそれに対する反応

明治百年記念式典は1968年10月23日金曜日に日本武道館で開催された。この祝典の基本理念は、日本が近代国家として発足した明治維新以来一世紀を迎えるに当たり、100年間における幾多先人の苦心経営の事績を顧み、次の100年への希望をこめて決意を新たにする機会とするため、明治百年記念式典を挙行するというものであった。式典の放送は、NHKとTBSがテレビ中継を行い、また、NHKによってラジオでも中継された 。

先述したように、「明治百年祭」に対するリアクションは1968年以前から始まっているが、反対運動が激しくなってくるのは1968年後半からである。政府の「明治百年祭」イベントに対して、1968年7月10日には過去の歴史を美化し、「歴史の見方をゆがめる」として猛烈な反対運動が始まった。歴史学研究会・日本史研究会など歴史関係の54の学会・研究会が反対声明を出した。その内、歴史学研究会委員会「『明治百年祭』反対運動の総括（帝国主義とわれわれの歴史学―国家と人民・大会特集）」(1969)では、「明治百年祭」の本質と政府の意図を批判している。加えて、次の3点が歴史家の反対運動の基本的観点として考えられる。それは、①非科学的・反動的な歴史観を、国家行事を通じて強制することに、②戦後民主主義の否定に、③「科学的歴史学」の成果を無視することである。これに関する一つの例として、『朝日新聞』(1968年10月23日)には、立命館大学全学部教授会の「明治百年祭」に反対声明が掲載されている。「政府が計画している『明治百年祭』には平和と民主主義の立場から反対する」との声明である。そして、「政府の考えている明治百年祭は明治憲法を肯定し、我が国が進めてきた戦争対策を認めることになる」 と批判を述べている。

● 事業・行事とそれに対する反応

「明治百年祭」イベントに関する事業としては、百年祭イベントとして始まり、現在も続いているもの、「青年の船」を紹

介したい。『青年の船10年のあゆみ』(1977)は本事業について、「青年の船事業は、青少年の健全育成と日本の青年と訪問国青年との交流を通じて相互の理解を深め、友好親善を促進することを目的とし、明治百年記念事業の一つとして、政府が昭和42年度から実施しているものである」と述べ、「日本の青年を乗船させ、船内で研修しながら世界各国に行く」ものとして説明している 。各地の見学と各国の青年と交歓をすることによって、日本青年の国際的視野を広め、国際協力の精神を涵養することを目的としている。

「青年の船」の参加者の反応について、総理府青少年対策本部『青年の船10年のあゆみ－青年の船の会代10回全国大会記念』(1977)で、宮崎幸雄は「帰ってから一年、正確な追跡調査をしたのではないが、参加青年の中には少数ではあるが、私が予想もしなかった関係が続いているのである。帰国後文通を絶やさない者、再びアジアを自分の足で歩くために出向いた者、フィリピン大学へ留学したもの、そして国際結婚をした者など、青年の船を契機にアジアへのコミットメントを深めようとする努力がなされている。又一方、アジアから学ぶものはないといったアジア軽視観を強くし、アジア離れをしていた者もいる」と述べている 。つまり、この事業を通してアジアへの関心を深めるものもいれば、アジアを軽視するようになったものもいたことがわかる。

本研究で紹介する行事は、「明治百年記念『21世紀の日本』創作、論文、作文、音楽及び図画」コンペティションである。新しい世紀への希望と夢を託した人類の真の進歩と調和を希求する若々しいビジョンがのぞまれた。「明治百年祭」イベントは、民族の誇り、国土の尊さ、国を愛する心の涵養を目指した。学校レベルで行われた背景には、「若者の参加を得る」目的があったと思われる。そして、応募総数が多かったことから、若者の参加が実際得られたと考えられる。しかし、重要なポイントがもう一つある。子供たちが自分自身で参加するのも可能だが、学校の先生の指導によって子供たちが参加したことの可能性が高い。これは、学校レベルにおいて教育者の反応の面から考えると、教育者の多くは政府の押し付けようとしたイデオロギーに対して反対の立場に立っていても、イベント自体に対して肯定的だったことを示している。各メディアにおいてもイベントとして行われた事業や行事自体に対する批判が確認できないのである。

３． 京都における「明治百年祭」イベント

● 準備会議とイベントに対する反応

京都府が、開庁百年を記念する「京都府百年祭」の実施を公式に表明したのは、1964年4月にさかのぼる 。これは、政府が、「明治百年祭」を全国的に祝うことを決定した時期より約2年前のことである。そして、地方自治体に対する政府の動きかけは、1966年12月、全国知事会議において非公式な要請という形で行われた。1967年10月、自治事務次官通達で都道府県知事に対し、地方公共団体の積極的な参加と協力を呼びかけるとともに、管下の市町村にもその主旨を徹底されたいとの要請が行われている。後に京都府が、京都府開庁百年記念式典を1968年6月19日に実施することを発表した。『京都府100年のあゆみ』(1968)では、蜷川虎三知事が「京都府開庁百年祭」が持つ意味について次のように述べている。蜷川はまず、京都の特徴を「①千年の古都であり学問の都である」、「②日本画壇の中心であり日本伝統の音楽や美術あるいは芸術的な工芸品が生み出された芸術の街である」、「③宗教の街として栄え、日本の宗教の指導的な地位にあって大きな役割を果たしてきた」、「④伝統産業の街である」の四つの部分に分けている。そして、京都のイベントの始まりとして決定された1968年6月19日について、慶応4年4月29日(旧暦)に京都府ができてから、ちょうど100年に当たることを説明している。また、「この間京都府は古い伝統と新しい感覚にささえられ、我が国の発展に大きく工夫してきた」と記述し、「ここに京都府開庁百年を迎えるにあたり、現在の理性と感覚において過去百年顧み、これからの府民の暮らしの道をひらいていきたい」と指摘している 。

そもそも、佐藤内閣の決定した10月23日に対して、京都府が6月19日を式典の開始として決定したことには意味がある。それを当時の文化事業室長の藤田二朗は、「“明治百年”という場合、色々議論もあり、またとかく反省なしの美化という危険もないことはない。明治元年に京都府ができたけれでも･･･もちろん自治体ではありません。そこで、私たちは、京都府という自治体に発展、成長してきた事実、それとそれを支えた府民の暮らしに着目したい」のであると発言している 。つまり、京都府は、東京のように「国家のために尽力した先人に感謝する」というメッセージよりも、「京都の歩み・発展・文化・美しさ」などを京都府民をはじめ、日本国民に理解させることを目的に、府としてのイベントを計画したのである。

しかし、日本史研究会は京都のイベントに関しても反応し、まずは、「京都府政百年事業」に対する要望を示した。その後、日本史研究会として会議を行い、「要望を行った後の府側の態度を見ると、日本史研究会の要望にそった改善はほとんど行われていません」 と発表し、「明治百年祭」反対運動において京都の各団体と京都府民の参加を呼びかける。日本史研究会が京都府から具体的に何を要望したのか、そして、「府側の態度」とは実際いかなるものであったかは確認できないが、日本史研

究会は会議の結果として次の発表をしている。「この政府の『明治百年祭』は、明治以後の日本の国家主義的な膨脹を一面的に讃美し、専制政府におる国民の抑圧と対外侵略の歴史をおおいかくし、戦後民主主義の成果をふみにじるものであり、それによって国民の歴史意義をねじまげ、国民の思想を国家主義、軍国主義の方向に動員しようとするものであります」 。この声明から明らかなように、日本史研究会は、東京に対する反応と同じく、京都の場合もイベントが持つイデオロギーに反対し、その国民に対する影響の危険性を厳しく批判している。

このように京都における「京都府開庁百年記念」の準備は「『京都』イメージを向上したい」府側と「イベントが持つイデオロギーに反対」という日本史研究会の対立の下で進められていた。そして、イベントが正式に開始されると、反対シンポジウム、デモなど反対派の動きがさらに激しくなり、メディアと京都府民にも反応が現れたのである。

● 「京都府開庁百年記念式典」とそれに対する反応

1968年6月19日は京都府が設置されてから百年目にあたる。京都府が6月19日に記念式典を行う趣旨については、「明治維新によって京都にも新しい時代に対応する行政組織が設けられてから100周年を迎えるにあたり、地方自治の発展と充実を念願して、この日を記念する」と述べられている 。ここで言われる「京都府開庁百年」の意義付けからも分かるように、京都のイベントは、佐藤内閣が発表した「日本国民が先人から受けた恩恵に感謝する」などのモットーに対して、「京都府の誕生と発展」に着目している。

「明治百年祭」と「京都府開庁百年祭」の違いについては、松本四郎「自治体と『明治百年祭』」（1968）が説明している。松本は、「京都府百年が蜷川革新府政のもとに『憲法にいう住民自治をみずからのもと』とするために式典」を実施したことを全国的にも数少ない事例として指摘している 。そして、他の自治体と異なり、京都府の「明治百年祭」に対する基本的態度を、「極めて明確な決定的な違いがある」と述べ、それは、「京都府庁開庁百年記念式典(6月19日)によみあげられた宣言に、京都の美しさ、文化の高さという歴史の遺産を、現代に生きるものがさらに発展させ、後代にひきづく義務と責任」があることに注目している。さらに、東京歴史科学研究会委員会「『東京百年記念祭』に反対し革新都政をそだてよう」(1969)では、「蜷川革新府政下の『京都百年祭』は、いままでみた場合といくつかの点で大きな相違点をみせている」と、京都のイベントの特徴について述べている。とくに、「憲法と地方自治体を守りそだてていくことを明瞭に表明していることは、『京都府百年祭』が『明治百年祭』の模倣でもなければ、尖兵でもない」と指摘する 。

京都の教育者達の反応としては、大きな反対運動として、1968年9月28日(土)に同志社大学学生会館において「明治百年祭」反対のためのシンポジウム、そして、1968年10月23日に、京都教育会館において「明治百年祭」反対京都集会と終了後デモが行われたことが確認できる 。筆者は、京都の反対集会で講演を行い、終了後のデモの主催者の一人でもあった同志社大学名誉教授の井ヶ田良治氏にインタビューを行うことができた。その結果、京都の大学人の多くが「明治百年祭」イベントに反対だったこと、京都市民はイベント自体に対して盛り上がらなかったこと、しかし、デモなどの反対運動に関する参加者数も少なかったことが確認できた。

● 京都における事業と行事

本節で紹介するのは、「京都の文化、京都の生活」を中心に紹介した、『京都百年展』である。京都府と毎日新聞主催の「京都百年展」は1968年5月7日午前10時から京都市中京区四条河原町の高島屋京都店7階で開始された。展示はテーマごとに五つに分けられ、第一室は「京都府の独立」で京都府の誕生をテーマにしていた。第二室は「文明開化は京都から」というタイトルで、京都府の文化、産業、府民の暮らしの道具、または府の交通などが紹介されていた。第三室「三代の流れ」は、明治から昭和への農民生活の変化、社会の移り変わりを取り上げていた。第四室「戦後の歩み」は京都の歴史を写真と年表を通して説明していた。第五室「伝統産業」は、京人形、京菓子、清水焼など、京都の伝統的なものを紹介していた。イベントに関して、府民の関心は非常に高く、わずか6日の展示会に約4万人が来場したのである 。 本イベントは様々な新聞でニュースになり、イベントに対する反対声も確認できなかった。そして、本イベントの特徴は、京都に注目し、京都府民及び、日本国民には「京都の伝統・文化・美しさ」などを見せることによって、「京都」イメージを強化させることであり、京都のみに着目していた。言い換えれば、「京都百年展」は全国的ではなく京都的なイベントであり、京都アイデンティティを強めようとしたものであった。

● 映画『祇園祭』

本研究は京都のイベントの中で最も重要なもととして映画『祇園祭』にスポットを当てる。映画『祇園祭』はまず、一つの紙芝居から出発する 。1950年、立命館大学の日本史専門家である林屋辰三郎教授が中心となって紙芝居『祇園祭』を製作する。これは、応仁の乱後に京町衆たちの自治体制がつくられ、その市民的なエネルギーによって祇園祭が復興された史実を紙芝居にしていたものだった。この企画に興味を持った伊藤大輔は、この紙芝居台本を入手、映画『祇園祭』の企画を始めた。一方、1961年に、同じ史実に基づき、この紙芝居からヒントをえた西口克己の小説『祇園祭』が出版され、俳優中村錦之助がぜひ自分でやりたいと言い出す。伊藤大輔はこれを基にして、作品のイメージをふくらませた。中村錦之助は、伊藤大輔もこの企画に熱心であることを知り、二人の共同戦線ができる。伊藤監督はこの小説を底本に中村錦之助主演で映画化する企画を東映に提出するが、「映画製作費が高い」などの原因で東映は映画化を断念する。そこで、中村は1966年に東映依存をやめ、東映との専属契約を解消する。後に、京都に移動し、資本金三百万円の株式会社日本映画復興協会を設立し、スポンサーを探し続ける。そして1967年に、プロデューサー・竹中労が府政百年記念事業として京都府に企画を持ち込む。当時の京都府知事である蜷川虎三氏は「京都は日本映画発祥の地であり、そこから産業としての映画復興の狼煙を挙げるのは、実に意義深いこと」と全面的バック・アップを表明し、映画の撮影が可能になる。

映画『祇園祭』は撮影終了後、日本全国で上映が始まると、短期間に大ヒットし、日本映画のロングラン記録を更新した 。『朝日新聞』（1968年12月3日）は、映画の成功について「『祇園祭』は洋画系ロードショー劇場で全国一斉公開される点が注目されていたが、二週目に入ってから逆に客足が伸びるという快調ぶりで、正月興行まで続映される見通しが強くなった。いずれにせよ日本映画のロングラン記録を更新することは確実だ」と記述し、観客数が増加していることについても述べている 。日本映画史上おいて映画大手五社以外の製作会社・配給会社を通したヒット作は類例がなく、画期的出来事であった。高木教典はその時期の日本の映画産業について、「松竹映配と新日本興業の洋画専門館でロードショー上映された『祇園祭』が成功するなど、このところ映画大手五社の邦画系統館以外で上映された映画が大ヒットしているのがひとつの傾向である」と述べている 。つまり「日本の観客が時代劇に関して興味を持ち続ける」ことと「映画産業の中の大手五社独占を止める」という意味で、『祇園祭』は日本映画産業の将来に大きな影響を与えたのである。

他方、河内将芳『祇園祭と戦国京都』（2007）では映画『祇園祭』に対する批判を述べている。映画『祇園祭』は、このように莫大な費用と人員を投じて製作された大作であったが、そのストーリーに対して河内は、「あいも変わらず、町衆と侍たちとの対抗関係がそのストーリーの骨格となっている」と批判する 。河内はさらに、「一見すると、なぜこうもはっきりと、敵と味方、あるいは、あちらこちらといった分けかたをしなければならなかったのか、不思議にさえ感じられる」 と疑問を提示するものの、その二項対立のゆえんについては踏みこんでいない。しかし、明治百年の文脈で映画『祇園祭』を捉えかえすと、むしろこの二項対立こそが重要であっただろう。権力に対抗する民衆の祭礼という祇園祭イメージがこの映画を通して強化されたのである。

５． 考察

● まとめ

「明治百年祭」、「東京オリンピック」と「大阪万国博覧会」は日本の戦後の大きいなメディア・イベントである。東京オリンピックが戦後復興の「現在」を実感させ、大阪万博が高度情報化の「未来」を幻視させたとすれば、1968年の明治百年祭は日本近代の「過去」を取り戻す国家イベントだったといえる。つまり、「東京オリンピック＝現在」、「大阪万博＝未来」、「明治百年祭＝過去」のメッセージを持っていたのである。その「過去」を国民に考えさせるために、佐藤栄作内閣は様々なイベントを計画したが、中には過去を肯定するメッセージがあり、それは歴史学者によって「危険」なものとして見られたため反対運動が始まった。メディアの反応はそれぞれであり、同じ新聞においても賛成の記事と反対の記事があった。結局、「明治百年祭」イベントを通して佐藤内閣と歴史学者とメディアの間で「記憶の内戦」が勃発した。「過去の100年間を国民に考えさせよう」という目的を発端として、歴史の評価をめぐる政治的立場の差異が顕在化したのである。この意味で、「明治百年祭」は、戦後日本の歴史認識をめぐる重要なイベントの一つであったと言える。

「明治百年祭」イベントは政府が意図した方向で進まなかったことは事実であり、イベントに対して国民の盛り上がりは大きくなかった。しかし、明治百年祭と同時期に出版された『竜馬がゆく』、『坂の上の雲』、『天皇の世紀』などは日本人の歴史意識・明治に対する考え方に影響を与えた。その意味で、本研究をもって検討してきた「明治百年祭反対」の論文の多くに指摘されていた「『明治百年祭』が失敗した」というのは、実はそうではなく、イベント自体を覚えている日本人の数は少なくても、「明治百年祭」イベントを通して発表された映画や小説などの物語が日本人の「明治意識」に影響を与えたことは、

メディア・イベントの成果として重要である。

「京都府開庁百年」は、「京都」のみに着目したイベントであった。イベントが始まった日付が東京と異なるところとして京都以外にも大阪、北海道などあるが、全体的には数少ない。そして、京都の準備が東京よりも2年早く始まっていることと、都会と町の差からいってもそれぞれのところのイベントが異なっていたことは当たり前なのかもしれない。しかし、イベントが行われた各地において、イベント内容に都市の個性を京都ほど反映させたものはなく、その意味で京都の「百年祭」イベントには京都イメージを向上される狙いがあったのである。しかし、それにもかかわらず、京都の日本史研究会を始め、大学人のほとんどが京都府に対して反対運動を行う。だが反対シンポジウムやデモなどが行われたにもかかわらず、府の行事や事業に対して府民は肯定的であり、イベントにも積極的に参加している。

一方、映画『祇園祭』は独立プロダクション作品として日本で初めて大ヒットした。明治の百年間を全国的に祝うイベントとして、過去百年の間の話ではなく、千年の歴史をもつ祇園祭の映画を作ること自体が「京都」のみに可能な企画であった。ここで、注意したい二つのポイントがある。その一つ目は、「映画『祇園祭』だけが「京都」イメージを作った」わけではないが、少なくとも「京都」イメージ形成の要因の一つとして考慮に値するということである。そして、二つ目は、本研究では京都を素材として取り上げたが、これは京都研究のためではなく、「明治百年祭」研究であり、「明治百年祭」研究の中から「京都」イメージを強化させたものに注目しているということである。

● 国境を越える「明治百年祭」

トルコ共和国の樹立が宣言されたのは1923年10月29日であり、2023年は100周年になる。イベントまではまだ9年あるが、現在も既に様々なプロジェクトが進められている。そして、2023年には大規模な「トルコ共和国百年祭」イベントが期待できる。

従って、「明治百年祭」の研究が将来、「トルコ共和国百年祭」研究の元になると思われる。「明治百年祭」イベントの研究を通して学んだものを「トルコ共和国百年祭」イベントのために利用し、「トルコ共和国百年祭」イベントを偉大なものにするために寄与するのが執筆者の目的である。

● 今後の課題

今後の課題としては海外在住日系人における「明治百年祭」研究を行いたい。そのために、「ハワイ日系人における「明治百年祭」イベントのメディア史的研究」というテーマで、ハワイに訪問し、調査を行う計画を立てている。これは研究テーマをできるだけ国際的なものにする試みであり、日本の日系人と同様にトルコの外にもたくさんのトルコ系移民が住んでいる事実も考慮しながら、日系人における「明治百年祭」イベントについて研究したい。それは、将来「トルコ共和国百年祭」イベントが行われたとき、海外に住むトルコ系移民がいかに振舞うのか、ということを考える材料にもなるだろう。

参考文献

1) 大丸義一[他](1968)「『明治百年』記念行事の意味するもの(座談会)」『文化評論』(76)、6-38、
2) 小野俊太郎(2012)『明治百年ーもうひとつの1968』青草書房
3) 河内将芳(2007)『祇園祭と戦国京都』角川叢書
4) 京都府企画管理部(1968)『京都府100年のあゆみ』
5) 京都府広報課(1968)『京都百年展アルバム』
6) 近藤正(1968)「『青年の船』乗船記」『社会教育』 23(6)、42-45
7) 佐藤卓己(2013)『物語 岩波書店百年史 2 「教育」の時代』岩波書店
8) 佐藤卓己(2009)『ヒューマニティーズ・歴史学』岩波書店
9) 佐藤卓己(2005)『八月十五日の神話―終戦記念のメディア学』ちくま新書
10) 佐藤伸雄(1968)「『明治百年祭』への歴史研究者のたたかい」『文化評論』(77)、144-147
11) 内閣(1969)『明治百年記念行事等記録』内閣総理大臣官房
12) 内閣(1968)『明治百年記念関係行事等概況』内閣総理大臣官房
13) 日本史研究会(1968)「『明治百年祭』に対する日本史研究会の態度」『日本史研究』(95)、93-95
14) 歴史科学協議会「明治百年祭」反対運動総括小委員会(1969)「われわれの反対運動と『明治百年祭』のみじめな敗北（「明治百年祭」反対運動の総括）」『歴史評論』 (222)、13-48